



今回新たに出土した富本銭 (左下径約2.5cm)



富本銭土坑B出土の富本銭鋳型



富本銭土坑Bから出土した富本銭鋳造に関わる一括資料



富本銭土坑B (中央の赤茶色の部分 南から)



木製の様(ためし)とそれを手本に作られた鉄製品 (鉄製刀子の長11.4cm)



釉のかかった有紋土器。新羅製か? (壺の径19cm)



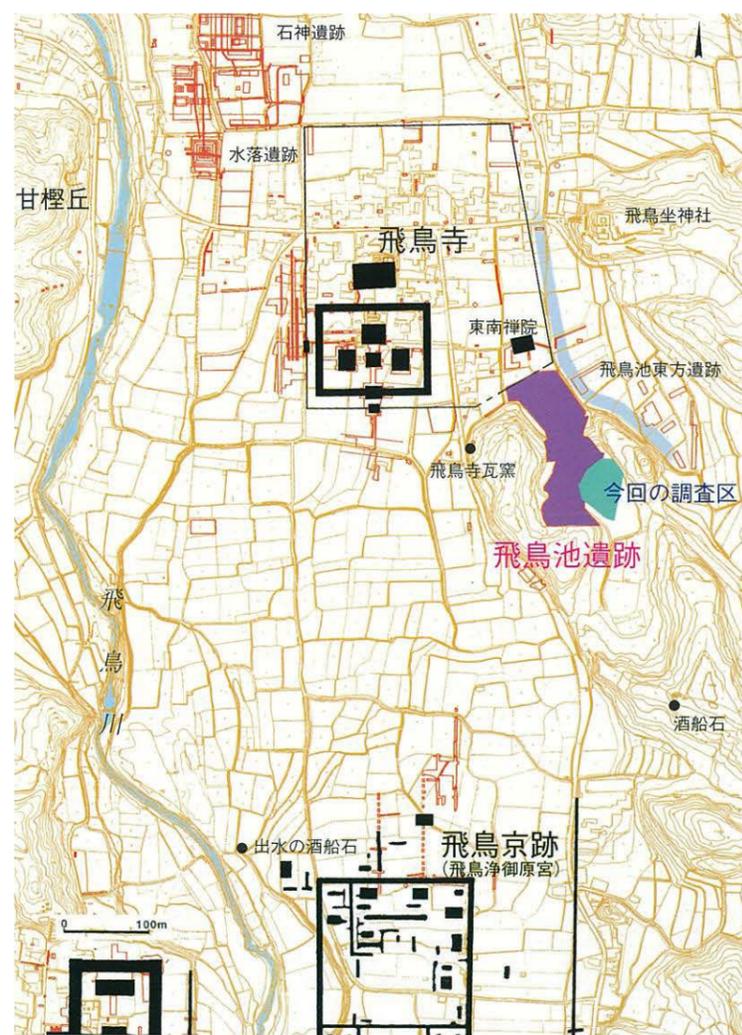
漆壺と漆のパレット (手前の土師器杯の径13.5cm)

飛鳥池遺跡

飛鳥藤原第98次調査 現地説明会資料



奈良国立文化財研究所
飛鳥藤原宮跡発掘調査部



はじめに

飛鳥池遺跡は1991年に発見され、1997年以降は、奈良県の「万葉ミュージアム」建設に伴う事前の発掘調査を続けてきた。今回はその6回目として、未着手だった管理棟建設予定地部分を発掘調査した。

調査区は南東から北西に伸びる谷筋にあたり、これまでに調査した北側（93次調査区）や西側（1991年・第87次調査区）から延びる工房の広がり把握することと富本銭鑄造に関する遺構・遺物の発見をめざした。調査は今年3月に開始し、現在も継続中。調査面積は約1200平方メートル。

掘ってわかったこと

調査の結果、7世紀後半から8世紀初め頃の炉跡群をとともなう工房跡、谷筋に堆積した工房からの廃棄物層(炭層)、谷に作られた5条の陸橋、谷を囲んで工房を区画する掘立柱塀などを確認した。さらに、炭層の中から富本銭鑄造に関する一括資料を発見した。

炉跡は、谷の北東側、総数160基以上の炉跡をとともなう工房跡（第93次調査区東辺）の南端部分に集中し、捨てた炭の上に何度も整地を繰り返して炉を築く。円い形の炉が多いが、一辺80cmほどの方形の炉跡も3基ある。方形の炉跡は炭焼き窯だった可能性もある。

調査区中央には幅約20mの谷がある。この谷には、

およそ7～10m間隔に人工の陸橋（幅1～3m）が5条かかっていた（陸橋1～5）。雨が降ったときに、下流へ一気に水が流れないように水を溜めたり、谷を歩いて渡るために作られたのだろう。

谷の南西側と北東側には南東－北西方向に走る2条の堀（堀1・堀3）があり、それをつなぐように陸橋1の西側には、谷を横断する堀2が作られていた。この堀2は南の丘陵頂上まで延びる。

さまざまな出土品

炭層や谷の堆積層などから、大量の遺物がみつかった。最大の発見は、富本銭の銭范（鑄型）。陸橋4北端の富本銭土坑から、富本銭鑄造に関する一括資料（鑄損じた富本銭・銭范・バリ・鑄棒・溶銅・フイゴ羽口・ルツボ）を発見した。周囲の炭層にも銭范の鑄型片が多量に含まれる。銭范は銭文がわかるものだけでも200点以上、小さな破片を含めると3000点近くある。富本銭も今回の調査区で177点が出土。遺跡全体からの出土総数は200点をこえた。銭の仕上げに使った砥石もみつかった。

このほか、人形・釘・飾金具などの銅製品、銅製品の鑄型、鉄鏃・釘などの鉄製品、それらの木製見本（様）、ガラスルツボ、砥石、木製品、木簡、土器、瓦なども出土した。

まとめ

飛鳥池遺跡が東の谷筋に沿って広がることを確認した。陸橋1の上流側の堆積層からも工房関係遺物が出土するので、工房はさらに谷の奥に続く。

この谷には、前回の第93次調査区でみつけたものを含めると、合計6条の陸橋が作られている。これらは谷の水をコントロールすることが第一の目的だった。谷に集まった水は、遺跡のほぼ中央にある東西方向の堀でいったんせき止められ、北にある石組方形池に溜められたのち、北東に排水される。いわば工場の污水处理施設が遺跡全体にわたって作られていたわけだ。飛鳥池遺跡は、工芸技術の高さや業種の多様さでも古代では並ぶものがない工房だが、環境にやさしい工房としても他に例をみない。飛鳥の都の真ん中に営まれたこの遺跡ならではといえよう。

今回の調査では、我が国最古の鑄造銭・富本銭の銭范（鑄型）がみつかり、関連遺物も多量に出土した。富本銭の鑄造がここで行われたことは、もはや動かしがたい歴史的事実となった。飛鳥池遺跡は、富本銭をはじめとする多種多様な生産をになったわが国最初の総合官営工房として、華やかな飛鳥の古代文化を物質面から支えていた。古代の飛鳥、さらには律令国家の建設にむかって進んでいた当時の日本を考える上で、この遺跡は、かけがえのない重要性を秘めている。

